

バルカンにおける空間認識

—19世紀バルカンにおける民族運動の連動性—

菅原 淳子

1. はじめに

1988年、冷戦終結直前に始まったバルカン外相会議はアルバニア、ギリシア、トルコ、ブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラヴィアの6カ国の外相が一堂に会し、体制の違いを超えて諸国間の信頼と相互協力の道を開くことになった。東側諸国の体制転換の最中に開かれた1990年の第2回会議で、諸分野における具体的な地域協力の推進が約束されたものの、その直後に勃発したユーゴスラヴィア内戦は、外相会議や具体的な地域協力を中断させることになった。ボスニア内戦終結後の1996年、6年ぶりに開かれた第3回バルカン外相会議では、ボスニア和平プロセスの進展にとりバルカン諸国の多方面にわたる協力が有効という認識に立ち、バルカンを安定と安全および協力の地域へと組替えていくことが謳われた。この会議にはユーゴスラヴィアから独立したクロアチアとスロヴェニアが、正式参加ではなくオブザーバーとして臨んだが、その理由には自分たちがバルカン諸国ではないという認識があった¹。またこの第3回バルカン外相会議以降、会議の名称は南東欧諸国外相会議と改められた。今日、バルカンではさまざまなイニシアチヴが存在し相互補完的な活動を行なっているが、南東欧諸国外相会議から生まれた南東欧協力プロセスは、両大戦間期のバルカン協商を継承する会議として自らを位置付けている²。

上述のエピソードは、今日のバルカンという地域空間の自己認識を示唆している。地理的にバルカン半島とはヨーロッパ南東部に位置し、ドナウ川以南を指している。しかし地域としてのバルカンは、中世にはキリスト教を国教とする帝国や王国が築かれた

¹ バルカンにおける地域協力の歴史に関しては以下を参照。今井淳子(菅原淳子)「バルカン『安定と発展のゾーン』へ——地域協力の歴史と現状」百瀬宏編『下位地域協力と転換期国際関係』有信堂、1996年。今井淳子「冷戦後のバルカンにおける地域協力」山極晃編『冷戦後の国際政治と地域協力』中央経済社、1999年。

² <<http://www.mae.ro/seecp/history.html>>

ものの、14世紀末以来400～500年にわたって、イスラーム帝国であったオスマン帝国の支配下に置かれた歴史を共有してきたヨーロッパである。そしてこのオスマン帝国による支配は、様々な民族からなるバルカン社会に共通の生活習慣や、風俗、精神文化をもたらし、地域への帰属意識を育んできた。18世紀末から19世紀にかけてギリシア人、セルビア人、ルーマニア人、ブルガリア人、アルバニア人のあいだで民族としての自覚が高まり、独立運動が展開されるが、そこで見出せる諸民族相互の関係や連帯意識の背景には、地域への共通の帰属意識があるといえよう。19世紀前半のセルビア蜂起、ギリシア独立戦争時にはルーマニア人、ブルガリア人が義勇兵を派遣する動きが見られ、また1860年代にはオスマン帝国との戦争に備えてギリシア、セルビア、ツルナ・ゴラ、ルーマニア間でバルカン同盟が結成されている。共通の敵に対する闘いの中で、バルカン全体の解放を目指すバルカン共和国やバルカン連邦の建設という構想も生み出された。独立達成後、諸民族は領土や少数民族の問題をめぐる激しく対立し、バルカン戦争や第一次世界大戦を引き起こしたが、一方では相互の対立を超える手段として地域的な協力関係の構築を模索した。それは両大戦間期にバルカン会議やバルカン協商を誕生させることになった。

本稿では、現代においてもなお共有されている地域への帰属意識の背景を探ることを目的として、バルカン諸民族の間で民族運動の連動性が見られた1860年代に焦点を当て、他の民族に遅れて解放を模索し始めたブルガリア人の運動から、諸民族の相互関係を考察したい³。

2. 地域の呼称について

オスマン帝国は、14世紀末から15世紀末までの約100年をかけバルカン半島に支配を確立していったが、支配の形態は一様ではなく、支配に入った時期、首都イスタンブールからの距離や地理的条件などによっても異なっていた。イスタンブールから相対的に近いブルガリア、マケドニア、セルビアやギリシアの一部は直接支配下に入り、一括してルメリ州という一つの行政単位に組み込まれ、いくつかの県に分けられた。これに対しツルナ・ゴラ、北部アルバニアなどの山岳地帯やギリシア島嶼部、ドナウ川以北のワラキア、モルドヴァのような遠隔地は間接的な支配の下に置かれたのである。

³ オスマン帝国支配下のバルカン諸民族の関係については以下を参照。今井淳子「地域の内外ネットワーク——19世紀バルカンにおける民族運動の展開」濱下武志、辛島昇編『地域史とは何か』山川出版社、1997年。

オスマン帝国では臣民はムスリム(イスラーム教徒)と非ムスリムで大別されおり、キリスト教徒とユダヤ教徒はムスリムにとり啓典の民であることから、人頭税と引き換えに信仰の自由が許されていた。バルカンの諸民族は一部を除いて中世の王国、帝国時代からのキリスト教(東方正教)信仰を維持することができたが、セルビアやブルガリアの教会がかつての独立性を失ったために、バルカンのキリスト教徒は一括してコンスタンチノーブル総主教座の管轄下に置かれた。オスマン帝国では民族性が問われることはなく、統計資料においてもバルカンの諸民族はキリスト教徒としてまとめられている。バルカンの諸民族のあいだでは、支配の初期からオスマン帝国内のキリスト教徒という意識が共有されていたと考えられるが、各民族が自らの民族性を意識し始めるのは18世紀末になってからであった。

この地域をバルカン半島と名づけたのはドイツの地理学者ツォイネ(A. Zeune)であるが、半島中央部、現在のブルガリアを東西に走る山脈を、オスマン政府がバルカン(樹木が生い茂る山々の連なりの意)と呼んでいたことに由来する。ツォイネは、バルカン山脈によってそれより南がヨーロッパの他の部分と分けられると考え、1808年にバルカン半島と名づけたのであった⁴。しかしツォイネと同時代に解放を模索する人々のあいだでは、バルカンとはドナウ以北も含めてオスマン帝国の支配下にある地域と考えられるようになっていった。

一方ヨーロッパ諸国においては、ヨーロッパとアジアが接する地域は古来「東方」と呼ばれてきたが、外交用語では「東方」とともに、オスマン帝国のヨーロッパ部という意味でヨーロッパ・トルコという表現も使われていた。バルカン諸民族の独立運動の高揚によってオスマン帝国の弱体化が進むが、こうしたバルカンをめぐる問題が、「東方問題」と称されるようになったのはギリシア独立戦争時であった⁵。

3. 東方問題の進展

18世紀末になると、バルカン諸民族のあいだでは内的な発展や西欧の啓蒙思想などの影響から、商人や聖職者など知識人を中心に民族としての意識が覚醒し、文化的な発展がみられた。民族的自覚を背景に19世紀初頭にはまずセルビア人、ギリシア人がオスマン支配に抵抗して蜂起した。これらの蜂起は地域全体を巻き込んだ戦い

⁴ 地域の呼称等については以下を参照。柴宣弘編『バルカン史』山川出版社、1998年。M. Todorova, *Imagining the Balkans* (New York, Oxford UP, 1997).

⁵ 東方および東方問題の由来については以下を参照。J.A.R. Marriott, *The Eastern Question* (Oxford, Clarendon Press, 1917).

に発展することはなかったが、蜂起をとおして諸民族のあいだには共通の敵に対する共闘の意識が生まれた。こうした動きの背景にはキリスト教徒としての一体感があったと考えられよう。1804年に始まったセルビア蜂起では、指導者たちが帝国内で一定程度の自治を維持していたツルナ・ゴラとの軍事的な同盟を模索した。また隣接するブルガリア西部やテッサリアでも蜂起に呼応する動きが見られ、さらに多数のルーマニア人、ブルガリア人、ギリシア人が部隊を結成して蜂起に参加したのであった。このようにセルビア蜂起は、反オスマンという共通の目標のもとにバルカン諸民族を初めて結束させることになった。つづく1821年からのギリシア独立戦争は、バルカンでの革命的気運をさらに盛り上げることになり、セルビア蜂起時と同様な動きが見られた。これらの蜂起や独立戦争に義勇兵を送ったブルガリア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナやアルバニアでも人々のあいだで民族意識が次第に高まり、こうした中でギリシア人リガス・フェレオス(Pheraios, Rhigas)の唱えた「バルカン全体の解放」⁶という思想も広まったのである。

ギリシア独立戦争の最終段階でロシア、イギリス、フランスが戦争に介入した結果、セルビアとギリシアは1829年にオスマン帝国内での自治が認められ、さらにギリシアは1830年に独立が承認された。19世紀前半のセルビア蜂起、ギリシア独立戦争は、バルカン地域とヨーロッパとの関係においても重要な転換点であった。これを機にヨーロッパ列強は、オスマン帝国の問題にいよいよ積極的に干渉することになったのである。またバルカン諸民族の側も、列強の介入によるオスマン支配からの解放に期待を膨らませることになった。なかでも1853年に始まるクリミア戦争は、ロシア軍とオスマン軍がドナウ川をはさんで交戦したことから、解放を願う諸民族に大きな期待を与えることになった。

ブルガリア人にとりクリミア戦争は、まさに民族の解放を目指す運動の出発点となった。ギリシア、セルビア、ツルナ・ゴラ、ワラキア、モルドヴァが19世紀半ばまでに国家としての体裁を整え始めていたのに比べ、ブルガリア人が自治や独立を模索し始めたのはクリミア戦争の最中であった。こうした動きはイスタンブルに近く、トルコ人が多く居住していたブルガリア内ではなく、ワラキアや南ロシアにあったブルガリア人移民社会で活発に見られた。18世紀末以降、商業活動に従事し始めたブルガリア人にとりイスタンブルのみならずブカレスト、オデッサ、ウィーンなどは活動の中心となっていたが、18世紀からの度重なる露土戦争時にドナウを越えて逃亡した農民が多数ワラキアや南口

⁶ フランス革命に感激したリガスはギリシア革命の先駆者となり、ギリシア人やオスマン支配下のその他の民族を統合してバルカン連邦を作るための反乱を準備しようとした。

シアに殖民し、19世紀初頭にはワラキア各地にブルガリア人の移民社会が生まれていた。これら移民社会では、ブルガリア内で禁止されていた政治新聞の発行や書物の出版が行なわれており、クリミア戦争を通して自治や独立を目指すブルガリア人の運動の拠点となった。

クリミア戦争が始まる直前、イスタンブールのブルガリア人社会の指導者は、祖国解放の請願書をロシア皇帝ニコライ1世(Николай I)の特使に手渡している。さらにイスタンブールでは富裕な商人など急進的な知識人が中心となって秘密協会を組織し、ロシア軍の進軍に合わせてブルガリア北部やバルカン山脈中央部で武装蜂起することを計画していた。この蜂起の宣伝の役割を担ってブルガリアに入ったのが、後に1860年代の解放運動を主導するゲオルギ・ラコフスキ(Г.Раковски)であった。またこの組織は他のバルカン諸民族との連帯を考え、セルビアとの共同行動やイピロス、テッサリアのギリシア人活動家との接触を試みたのであった。南ロシアのオデッサのブルガリア協会も皇帝宛ての請願書を作成し、さらにロシア軍と共に戦う義勇兵の募集に乗り出した。募集活動の中で、自らの故郷の町や村との関係が重要な役割を果たしたのである。彼らが描いていた将来のブルガリアは、セルビア自治公国をモデルとしたロシア保護下の民族の自治であった。またブカレストの移民社会でも同様にブルガリア委員会が作られ、義勇兵を募った。この組織の要求も、セルビア人やモルドヴァーワラキア人が享受しているのと同様な自治であった。クリミア戦争はロシアの敗北で終結し、ブルガリア人の願いがかなうことはなかったが、この戦争中にはじめて各地の移民社会で組織が誕生し、フィリケ・エテリアがそうであったように商人たちを中心にブルガリアの解放を模索しはじめたのであった。

4. 1860年代前半バルカン情勢と移民社会

クリミア戦争中にブルガリア北部や中部ではラコフスキの煽動もあり、一部の都市で蜂起の準備が進められていたが、これらの組織が中心となり、戦後1856年、57年とタルノヴォ、ヴィディンで相次いで蜂起が引き起こされた。蜂起の原因は、パリ講和条約で約束された帝国の改革(ハッティ・ヒュマユン)が全く実行されていないことに対する抗議であった。いずれも小規模で直ちに鎮圧され、蜂起参加者の多くはドナウ川を渡ってワラキアへ亡命した。

1860年代を通じてブルガリア解放の手段をめぐっては、主として移民社会のブルガリア人のあいだで模索が続けられた。ブカレストをはじめとしてワラキアの諸都市や南

ロシアのオデッサ、ボルグラードなどの移民たちのあいだには緊密なネットワークが形成されていた。クリミア戦争後の移民社会には、オスマン帝国内の改革による状況改善を望む富裕で保守的な商人を中心とするグループと、蜂起によって独立を目指す急進的な青年のグループが生まれていた。長老派(сталите)と青年派(младите)と呼ばれるようになっていた両派は、常に反目していたわけではなく相互の関係も維持されていた。また移民のあいだには他の勢力も存在していたが、両派の活動が1878年の解放に至るまでの時期において、重要な役割を果たすことになった。ブルガリア外部の移民社会に存在していたことから、両派共にロシアをはじめとする列強の外交政策や、すでに独立や自治を獲得していたバルカン諸国の動向に関する情報を容易に入手することができた。このことは後述するように、両派が主導するブルガリア人の運動が領土拡大や完全独立を目指すバルカン諸国の政策や、未だオスマン帝国の直接支配下にあるバルカン諸民族の解放運動と連動することを可能にしたのであり、またバルカン諸国の側もブルガリア人の運動を利用したのであった。

クリミア戦争後のイタリア統一戦争やドイツ統一の動きは、当然のことながらバルカン諸民族に刺激を与えることになった。1860年代初めのバルカン諸国では統治者の交代が相次ぎ、各国の抱える問題が明確になってきていた。自治公国セルビアでは、クリミア戦争でロシア側に立たなかったことに対する不満から、1859年に議会は公アレクサンダル・カラジオルジェヴィチ(Aleksandar Karadjordjević)を退位させ、前公ミロシュ・オブレンヴィチ(Miloš Obrenović)を20年ぶりに復位させた。1860年にミロシュが死去すると息子のミハイロ(Mihailo)が後を継ぎ、首相にガラシャニン(I. Garašanin)を任命した。ガラシャニンは1844年に『ナチェルターニエ』を著わし、セルビア人の住んでいる地域をすべて併合した大セルビアの建設を謳った人物である。ミハイロは、南スラヴ人の統一のためにはオスマン政府との戦いが不可避であると考えていたが、当面の問題としてはベオグラード要塞のオスマン守備隊の撤退と、市内のトルコ人居住区の撤去があった。

クリミア戦争中から統一国家の建設を目指していたワラキア、モルドヴァ両公国では、同一人物を両国の公に選出することで統一の達成を試みた。1859年に両公国では土地貴族のアレクサンドル・クザ(A.I. Cuza)を公に選出し、クザによる統一は61年のイスタンブール列国会議で列強に承認され、62年にはルーマニア公国として成立した。しかし統一に伴うクザの急進的な改革は、まもなく土地貴族や農民、さらには自由主義者との関係を悪化させることになった。

バルカン諸国内ではこのような変化が見られていたが、未だ国家を持たずにいたブルガリア人のあいだでは、クリミア戦争中に蜂起を模索していた急進的なラコフスキが新たな動きを見せていた。戦争中にオスマン政府の追跡を逃れたラコフスキは、ブカレストを経て、1856年にはオーストリア領内ヴォイヴォディナのノヴィ・サドに移り政治新聞を発行していた。しかしオスマン政府の要請を受けたオーストリア官憲によりまもなくノヴィ・サドを追放され、58年にはオデッサに落ち着いた。オデッサでラコフスキは、その後の彼の行動指針となる「ブルガリア解放のための構想」⁷を執筆したが、構想に示された武装部隊の派遣による蜂起という戦術は、1860年代を通じてラコフスキ周辺の急進的な青年派の基本路線となるものであった。

構想で示された6項目は次のとおりである。

- ①秘密指導部をブルガリア国外に設置
- ②ロシア、ワラキア、モルドヴァに居住する富裕なブルガリア人商人からの資金獲得
- ③武装部隊のブルガリアへの派遣による民衆のあいだでの煽動と蜂起の準備
- ④ブルガリア内に駐屯するトルコ軍の配置、規模の調査
- ⑤ギリシア、セルビア、ツルナ・ゴラへの連帯行動の呼びかけ
- ⑥ブルガリア解放の請願書を持った特使をペテルブルクおよびパリの議会へ派遣

上記の②が示すように、武装行動に必要な資金を得るためにいわゆる長老派との接触も考慮していたし、また⑤からはバルカン諸民族との関係、⑥からは列強の支援の必要性も重視していたことが理解できる。

1860年、ラコフスキはベオグラードに移って新たな政治新聞を発行していたが、彼の新聞はひそかにブルガリア内にも持ち込まれ、移民だけではなく国内の愛国的な人々にも大きな影響を与えた。国内では約束された改革が実施されず、農民の窮乏や手工業者の没落がいつそう進み、人々の不満は高まっていた。蜂起実現の可能性を感じたラコフスキは、1861年末に「ブルガリア解放のための構想」第2案⁸を執筆し、具体的な蜂起計画を著わした。計画は、1000名のブルガリア人からなる武装部隊をセルビアからブルガリアへ進入させ、バルカン山脈を進んで最終的には旧都タルノヴォを占領する。タルノヴォに至る山間部の町や村で蜂起を起こし、進軍しながらハイドゥクや一般の人々を部隊に組み込む、という内容であった。

まさにこの時期、ヘルツェゴヴィナでも農民蜂起が勃発した。クリミア戦争後に新たな土地法が施行されたものの、農地問題が解決されないことが原因であった。隣接す

⁷ “План за освобождение на България Ноември-Декември1858”, *Христоматия по история на България*, т. II, София, 1969, с.293-296.

⁸ “План за освобождение на България 1861”, Пак там, с.305-307.

るツルナ・ゴラでは、1860年に公ダニーロ(Danilo Petrović)が暗殺され甥のニコラ(Nikola)が公位についていた。彼はツルナ・ゴラの長年の野望であるヘルツェゴヴィナの併合を画策していたが、農民蜂起には中立を保とうとしていた。しかし彼の意に反し、多くのツルナ・ゴラの民衆が南スラヴ人の同胞を支援するために蜂起に加わった。オスマン軍はヘルツェゴヴィナの農民蜂起を鎮圧すると、1862年春には国境の秩序回復を名目にツルナ・ゴラに侵攻し、ニコラはこれを迎え撃った。戦いはニコラの負傷で終結したが、ロシアとフランスの外交圧力でオスマン軍による占領は回避されたのであった。

このような緊迫する状況の中で、セルビアはベオグラード要塞の問題の解決を図ろうとした。1861年末、イスタンブルではワラキアとモルドヴァの統一を承認するための列国会議が開かれ、そこでセルビアは要塞問題を持ち出したのである。しかし守備隊撤退という要求は退けられ、ここに公ミハイロはオスマン帝国との戦争を決意したのであった。ミハイロは、戦争の際にはブルガリアでも蜂起を起こしてセルビアの後背を固めようと考え、以前からその活動を注目していたラコフスキに接近したのである。これを受けてラコフスキは1862年春、ベオグラードにブルガリア軍団を創設し、ブルガリアでの蜂起の準備をすすめた。軍団にはクリミア戦争に義勇兵として参加した青年を中心にブルガリア内だけではなくルーマニア、セルビアに居住する移民たちも加わり、その数は600名を超えた。6月になるとラコフスキは、蜂起の全体指揮をとるべく臨時ブルガリア司令部をベオグラードに設置し、来るべき蜂起に備えた。

6月、ベオグラードではトルコ兵によるセルビア人殺害事件が起き、セルビア人とトルコ人住民間の緊張はセルビア人によるトルコ人の店舗襲撃にまで発展した。これに対処するために要塞のオスマン軍守備隊は、ベオグラード市内に向けて攻撃を開始した。反撃するセルビア軍と共に、誕生したばかりのブルガリア軍団も守備隊との戦闘に参加したが、セルビアとオスマン政府間の緊張は、ラコフスキが期待した戦争に至ることはなかった。列強の介入によってオスマン政府は、ベオグラード要塞は保持するものの市内のトルコ人居住区は放棄することに合意した。一方セルビア政府は列強の要請を受けて、ブルガリア軍団を解散させたのであった。ブルガリア内ではベオグラードでの戦闘の情報が届くと、タルノヴォ周辺で小規模な蜂起が起きたが、オスマン軍により短時に鎮圧された。

このようなバルカン情勢とりわけ地理的に近いツルナ・ゴラとオスマン軍の戦いは、ギリシアにも領土拡大の好機到来と映った。1830年の独立に際しドイツから国王オトン(Othon)を迎えたギリシアでは、オトンの専制的な政治に国民の不満が高まっており、

国王は不満をそらすためにも国民の関心をメガリ・イデア(大理想)に向けようと試みた。オスマン支配下に残されたギリシア人の蜂起を画策したオトンは、イタリアのガリバルディ(G.Garibaldi)に協力を求め、セルビアとの関係も模索していた。しかしまもなくツルナ・ゴラでの戦争が終結し、要塞問題に関してセルビアも列強の仲裁を受け入れたため、ギリシアは具体的な行動に出ることはなかった。この直後にオトンはクーデタにより退位を余儀なくされ、替わってデンマーク王子ゲオルグ(George)がゲオルギオス1世(Georgios I)として王位についた。新国王のもとでメガリ・イデアは、オスマン帝国に残されたギリシア人の統一という新たな内容をもって、国民の支持を得るようになったのである。

以上のように、1861年から1862年のバルカンの危機では、一部を除き諸民族の運動、各国の動向のあいだに意識的な協調が見られたわけではなかった。しかしラコフスキの構想に見られるように、国家を持たずにいたブルガリア人活動家のあいだでは、オスマン支配に対する闘いにおいて協力や連帯が必要であることは明確に認識されていたのである。またセルビア公ミハイロもイスタンブル列国会議以後、オスマン帝国に対する将来の戦争を想定してバルカン同盟の結成を考えるに至った。首相ガラシャニンとオトンの特使のあいだで同盟をめぐる話し合いが持たれたものの、オトン退位後は具体的な交渉に入ることができずにあつた。1863年に入り、ミハイロがセルビア政府の正式な特使として新たにアテネに送ったのはラコフスキであった。ラコフスキは、ブルガリア人の解放運動の指導者としてアテネやツルナ・ゴラを回ったが、そこで彼が感じたのは積極的な共闘という意識ではなく、セルビアも含め既に独立や自治を得ている国々の領土拡大の意図であった。バルカン諸国との同盟に失望したラコフスキは、63年末にはブカレストへ向かった。ブルガリア人の革命運動に関心を寄せていた公クザに期待し、ルーマニアでの活動の可能性を探ることになった。

5. 1860年代後半のバルカンの危機

バルカンの情勢が再び緊迫するのは、1866年から68年にかけてであった。1866年2月のルーマニアでのクーデタ、9月に勃発したクレタ蜂起はオスマン帝国を動揺させることになった。1866年の状況は、祖国の解放を模索するブルガリア人移民とりわけブカレストの移民たちの活動を刺激した。活動を考察すると、1862年時以上に、バルカン諸国の動向と連動しているのが明らかになる。

当時ブカレストには、クリミア戦争中にロシアの要請に応じてブルガリア人による義勇軍の編成に役割を果たした富裕な商人たちの組織が存続していた。1861年に慈善協会(Добродетелно Дружество)と改称し、ブルガリア内への様々な支援を行ないながら、ブカレストのロシア領事やイスタンブールのロシア大使イグナチエフ(Н.П.Игнатиев)と密接な関係を維持していた。このイグナチエフは、当時のロシア外務省にあっては汎スラヴ主義の強力な唱道者の一人であり、バルカンのスラヴ民族のあいだで汎スラヴ主義を押し進めようとしていた。慈善協会周辺の商人たちは長老派と呼ばれ、ロシアの援助があってこそブルガリアの解放は実現できると考え、ロシアのバルカン政策に期待を寄せていた。

一方青年派と呼ばれることになる急進的な若者たちのあいだには、ラコフスキがブカレストに移った当初は、まだはっきりとした組織は存在してはおらず、1866年2月のクーデタ後、ルーマニア人自由主義者からの働きかけで誕生することになったのである。

ルーマニアでは初代公位についたクザが修道院財産の国有化、農地改革、教育改革に着手し、近代国家への道を歩み始めていた。しかしオスマン帝国の間接支配の下で貴族の大土地所有が維持されてきたルーマニアでは、農地改革は土地貴族の強い反発を招くことになった。さらにブラティアヌ(J.Brătianu)やロセッティ(C.Rosetti)など自由主義者は、1864年以来のクザの独裁政治に不満を募らせており、「立憲政府を擁護するための」組織を結成するまでになっていた。彼らは、公位が空位になった際にはヨーロッパの王朝から公を選出することを主張し、フランスのナポレオン3世(Napoleon III)に打診してホーエンツォレルン・ジグマリンゲン家のカール(Karl)を薦められていた。1866年2月、ついに自由主義者のクーデタは成功し、クザは公位を追われた。しかしクーデタに反対するオスマン政府とロシアがクザの退位に抗議したことから、3月にはルーマニアの公位問題をめぐる列国会議がパリで始まった。オスマン政府は、会議と並行してルーマニア進撃の準備を開始したのであった。政権を掌握したブラティアヌらは、オスマン軍の攻撃に備えて軍隊を動員させたが、さらに外国人部隊の編成も検討し、ラコフスキを中心とする急進的なブルガリア人青年のグループにも接触したのである。

この時期、オスマン官憲に追跡されるという理由でラコフスキが一時的にルーマニアを離れていたため、ロセッティがブルガリア人による義勇兵部隊の編成を依頼したのはラコフスキの同志イヴァン・カサボフ(Ив.Касабов)であった。ベオグラードのブルガリア軍団以来ラコフスキと行動を共にしていたカサボフは、ベオグラードの失敗から義勇

兵の編成ではなくオスマン軍の進軍に合わせてブルガリア内で蜂起を起こすことを提案した。これを受けてカサボフらブカレストの青年派はブルガリア秘密中央委員会(Българския Таен Централен Комитет)を組織し、ルーマニア側の秘密委員会と神聖連合(Свещенната коалиция)を結成して蜂起の準備にあたることになった。両委員会のあいだではしばらく交渉が行なわれ、神聖連合締結の協定案⁹が作成されたが、最終的にはルーマニア側が署名を拒んだことから連合は成立することはなかった。その理由はルーマニアとオスマン政府との関係正常化であった。オスマン政府はドナウ川の対岸ブルガリア側に軍隊を集結させていたが、6月に入ると列強の助言を受け入れてクザの退位を承認したのであった。

1866年9月に入ると、バルカンは再び騒然とした。クレタ島で、オスマン支配からの解放とギリシアとの統一を目指した蜂起が始まったのである。蜂起は当然のことながらギリシア政府に衝撃を与えた。戦争準備が整っていないことを理由に、国王ゲオルギオス1世と首相ヴルガリス(D.Voulgaris)はオスマン帝国との戦争には消極的であったが、義勇兵として蜂起に参加する民衆は跡を絶たなかった。この時期セルビアでは、機に乗じてベオグラード要塞からのオスマンの守備隊の完全撤退を要求しようとする気運が高まっていた。こうした状況の中で、セルビアは再びバルカン同盟結成を試みたのであった。こうした動きに連動する形で、ブカレストのブルガリア人のあいだでは、祖国解放を模索する動きが活発化したのである。1867年になると三つのグループが独自の活動を展開した。

カサボフの秘密中央委員会は神聖連合案が消えた後も存続していたが休会状態にあり、1866年末にロシアからブカレストに戻ったラコフスキは、自らの留守中に作られた委員会を痛烈に批判し、新たにブルガリア秘密最高人民司令部を作って急進的な青年を集めた。ラコフスキはバルカン全体で行動するという考えを否定はしなかったが、ブルガリア人は独自に行動すべきだという思いを強くしていたのである。彼は、今こそ武装部隊をブルガリア内に潜入させて民衆を煽動し、革命を起こしてオスマン支配を転覆できると考えていた。翌67年春、ラコフスキは、民衆を煽動するためにパナヨット・ヒトフ(П.Хитов)とフィリップ・トーチュ(Ф.Тотю)を隊長とする2部隊をブルガリアへ送った。この武装部隊の軍資金調達のために、ラコフスキは長老派と接触したのである。長老派は武力による祖国の解放には反対していたが、ブルガリア内の状況把握の

⁹ 神聖連合の目的は、共通の敵に対する東方のキリスト教徒諸民族の一斉蜂起に向けての精神的な準備としている。ルーマニア側はスラヴ人、ギリシア人との連帯を考えていた。“Текст на Свещенната коалиция 1867”, *Христоматия*, с.334-335.

必要性を感じていたのであった。青年派の活動は、同年秋のラコフスキの死により指導者を失い、一時中断を余儀なくされることになった。

長老派の組織である慈善協会はロシア外交に依拠していたが、この時期のロシアはバルカンにおいて活発な外交政策を展開していた。1866年11月、ロシア政府は新たに「トルコにおける改革およびトルコのキリスト教徒の実質的な状況改善のための計画」¹⁰を公にし、オスマン帝国を民族に沿って行政区に分けることを提案した。これに基づいてロシア大使イグナチエフは、懸案の要塞問題についてはセルビアを支持し、一つの南スラヴ国家の建設実現によってブルガリアを解放すべきであると、ブカレストのロシア領事をつうじて慈善協会に理解を求めた。ロシアの提案を受けた慈善協会は1867年4月、セルビア公ミハイロのもとでの南スラヴ連邦の形成を検討することになり、ブカレストのセルビア代表と接触した。慈善協会が作成した「セルビア—ブルガリア間の政治的関係についてのプログラム」¹¹では、セルビアとブルガリアは連邦を形成し、ブルガリアの領域としてはミディア、トラキア、マケドニアを含むとされた。また、ブルガリアは自らの言語を使用するが、法律はセルビアの法律を導入し、内閣と議会は両民族から構成されるとした。セルビア政府に提示されたこのプログラムに関して、セルビア首相ガラシャニンは原則的に受け入れるとしたが、これがブルガリア人を代表する有識者全員に受け入れられているのか危惧をしていた。このような状況の中で、ブルガリア内の状況を探る目的で、慈善協会はラコフスキの派遣する武装部隊を利用したのであった。

慈善協会は、ルーマニア諸都市やオデッサなどの移民社会だけではなくブルガリア内にも支部を持っており、セルビアとの公式な協定締結の準備のために4月中にブルガリア人代表者会議を開くことにした。会議には各支部からの代表35人がブカレストに集まり、「南スラヴ国家創設に関する草案」¹²を採択した。草案前文では、ブルガリア人解放の方策として既に自由を獲得している民族との統一の道しかなく、その民族としては同じく南スラヴ人であるセルビア人以外にないと述べている。国家の名称は南スラヴ王国とされ、セルビア王国とブルガリア王国から構成され、ブルガリア王国はブルガリア、トラキア、マケドニアから成るとされた。5月、ガラシャニンはこの草案を受諾したも

¹⁰ Г.П. Генов, *Источина въпрос*, София, 1926, с.204.

¹¹ “Записка на Н.Н.Раевски за политическите организации на българската емиграция в Румания и тяхната дейност”, *Русия и българското национално освободително движение 1856-1876 – Документи и материали*, том 2, София, 1990, с.425-428.

¹² “Проектопротокол за създаване на Югославянска държава”, *Христомация*, с.319-320.

の、トラキアとマケドニアをブルガリアに組み入れることには難色を示した。その理由は後述するように、バルカン諸国間での領土配分の問題があった。ガラシャニンは、草案に基づく協定に則り我々は行動に移ると述べたが、最終的には慈善協会とセルビア政府間の協定締結は実現することはなかった。その代わりにセルビア政府は、来るべき蜂起に備えて指導者を養成する目的で、8月にはベオグラードにブルガリア人のための士官学校を設立したのであった。士官学校はロシアの資金援助のもとセルビア人将校が教授にあたるというもので、ブルガリアに潜入して帰還したヒトフ、トーチュの武装部隊のメンバーを含め、ブルガリアやルーマニアから約200名の青年が入学した。セルビアとの合同に失敗した長老派は、1869年1月、クレタ問題をめぐるパリ列国会議が開催されると、ブルガリア解放を求めた請願書を会議に送付したのであった。

ラコフスキを中心とする青年派、長老派の慈善協会の動きとは異なり、ブルガリア秘密中央委員会のほうは全く新しい方針を打ち出すことになった。ラコフスキの非難を受けてブカレストをしばらく離れたカサボフに代わって、組織の中心的役割を担ったのはパンテレイ・キシモフ(П.Кисимов)であった。彼はタルノヴォの富裕な商人であったが、1862年のタルノヴォ蜂起にかかわった後、南ロシアに亡命した人物であった。1866年、彼は「ヨーロッパに直面したブルガリア」というパンフレットを出し、東方問題の中のブルガリアを考察し、列強の賛成なしにはバルカン半島の最も重要な問題は解決できないとの結論から、クレタ蜂起のような武装闘争ではなく、東方問題を早急に解決するよう西欧に求めていくことを訴えた¹³。その後ブルガリア秘密中央委員会のメンバーとなったキシモフは、67年にはブルガリアが自治を獲得する現実的な方策としてオスマン帝国との二重帝国案を打ち出したのである。すなわちブルガリア人が居住する地域をブルガリア帝国とし、独自の議会、行政機構、裁判所、軍隊を有するが、政治的にはオスマン帝国に従属する。スルタンはオスマン帝国のスルタンであると同時にブルガリア帝国のツァールとするという内容¹⁴で、明らかに同年3月に成立したアウスグライヒの影響を受けたと考えられる。

二重帝国案は秘密中央委員会の新たな提案として、覚書の形でスルタンアブドゥル・アジズ(Abdul Aziz)とヨーロッパ政府に送付された。しかしオスマン政府のみならずヨーロッパ諸国からも回答や反応を得ることはできず、またブカレストの長老派、青年派の双方からも批判を受ける結果となった。さらに秘密中央委員会の中には、移民社会の青年派の革命的傾向に 대응するためにも蜂起戦術を否定すべきではないという

¹³ Г. Якимов, *Пантерей Кисимов – живот и дейност*, София, 2003, с.168.

¹⁴ “Мемоар на БТЦК до Султан Абдул Азис”, *Христоматия*, с.324-332.

意見も多く、最終的には委員会の解散を引き越すことになった。1868年春、キシモフは慈善協会に接近し、カサボフは新たにブルガリア協会(Българско Общество)、のちに青年ブルガリア(Млада България)を創設した。ブルガリア内での煽動活動を行なう一方で、ジュネーヴやロンドンに使節を送りゲルツェン(A.И.Герцен)、バクーニン(M.A.Бакунин)やマッツィーニ(G.Mazzini)との接触を試みた。青年ブルガリアにはラコフスキの影響を受けたヴァシル・レフスキ(В.Левски)ら青年派も多数参加したが、組織は短命に終わった。1870年、レフスキたちは70年代の急進的な解放運動を主導するブルガリア革命中央委員会(Българския Революционен Централен Комитет)を設置することになる。

6. バルカン同盟の結成とバルカン連邦構想¹⁵

クレタ島の蜂起は、セルビアとギリシア間で再び同盟結成の気運を高めることになった。セルビア公ミハイロはイタリアの統一に刺激を受けており、即位した当初から『ナチェルターニエ』を基本に、セルビア人だけではなく南スラヴ人の統一を目標とした外交を展開しており、実現のためにはオスマン帝国、オーストリア帝国双方との戦争が避けられないと考えていた。1861年にギリシアと最初の同盟交渉に入った背景には、ロシアの外交政策の変更があった。1860年初頭、ロシアがバルカン政策をバルカンにおける独立国家の建設へ転換したことから、セルビアはオスマン帝国との戦争を想定してギリシアに接近したのであった。ギリシアもイピロス、テッサリアをはじめギリシア人居住地の統一を目論んでおり、セルビアの同盟交渉に応じたのである。1861年、交渉の席でギリシアは、「バルカン4カ国の協商あるいはギリシ・セルビア同盟の形成によって、東方問題はバルカン諸国自身の手で解決されるであろう」と述べている。交渉では戦争に勝利した際のオスマン帝国の領土分割に関する取り決めもなされた。具体的にはテッサリア、イピロス、マケドニア、トラキアおよび島嶼をギリシアが併合し、それに対しセルビアは北アルバニア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナおよびツルナ・ゴラを併合するという内容であった。しかし調印自体はセルビアの国内事情で実現されず、翌

¹⁵ バルカン同盟と連邦構想については以下を参照。L.S. Stavrianos, *Balkan Federation : A History of the Movement toward Balkan Unity in the Modern Times* (Northampton, 1944).

D. Djorđević, "Projects for the federation of South-East Europe in the 1860's and 1870's", *Balkanica* 1, 1970.

62年にミハイロが使節をアテネに送ったのは、オソンの退位でギリシア国内が混乱している時期であった。

1866年9月のクレタ蜂起の勃発はギリシアとセルビアを再度近づけることになった。しかしオスマン帝国支配から解放された後の領土をめぐり、セルビアが旧セルビアすなわち北部マケドニアを要求したことから、両国の交渉は一時暗礁に乗り上げた。ロシアの仲裁で交渉が再開され、同盟締結に至ったのは1867年8月になってからであった。1866年9月、ギリシアとの同盟に先んじて、セルビアはツルナ・ゴラと同盟を結んでいる。前述したようにツルナ・ゴラは、1861年のヘルツェゴヴィナ蜂起が鎮圧された後にオスマン軍の侵攻を受けた。戦闘で負傷した公ニコラはその後、オスマン帝国との戦争はセルビアとの密接な同盟によってのみ勝利できると確信するようになった。セルビアとの交渉の中で両国の統一にまで議論が発展し、66年の同盟条約では将来的にはニコラの退位とセルビア=ツルナ・ゴラ国の創設が謳われたのであった。

セルビアとルーマニアの関係は、セルビアに向けたロシアの武器の輸出にルーマニアが協力したことから始まっていた。1866年、クザに代わってカロール(Carol)が即位した後も両国の関係は良好に保たれてきており、68年1月、オスマン帝国支配下にあるキリスト教徒の解放のために両国は共に行動することでついに合意が成立した。同盟条約では、戦争に勝利した際に両国はオスマン帝国の領土を獲得するとして、ルーマニアはドナウデルタの島嶼および北部ブルガリアを、セルビアはボスニア、ヘルツェゴヴィナおよび旧セルビアに加えてルーマニアが獲得した地域以外のブルガリアを獲得地域とした。またルーマニアのギリシアの間でも1867年には交渉が始まったものの、最終的には同盟締結には至らなかったが、東方問題は東方のキリスト教徒の一致した行動で解決されるべきであるという点では合意に至った。

セルビアがブカレストの慈善協会とのあいだで南スラヴ国家の建設をめぐって交渉を始めたのは、まさにこのような状況が展開されている時期であった。セルビアはさらにアルバニア人との協力も模索していた。アドリア海の対岸、イタリアにあるアルバニア人移民社会からもたらされたイタリア統一運動やガリバルディの思想の影響もあり、1860年代のアルバニアでも蜂起が頻発していた。ロシアの後押しもあり、セルビアはアルバニア蜂起指導者の一部とも接触していたが、最終的には協力関係を築くには至らなかった。

このようにセルビア、ツルナ・ゴラ、ギリシア、ルーマニアはオスマン帝国との戦争を想定して同盟関係に入り、さらにセルビアは、ブルガリア人やアルバニア人の解放運動をも取り込もうとしたのであった。しかしバルカン同盟は、1868年6月、主唱者セルビア

公ミハイロの死によって発動することなく解体した。同年12月、クレタに入った義勇兵の退去を求めてオスマン政府がギリシアに最後通牒を送ると、両国間の緊張は一時高まったが、ビスマルク(O.von Bismarck)の仲裁によりパリで列国会議が開かれ、戦争は回避された。ここに、1866年からのバルカンの危機も一旦終止符が打たれるが、ブルガリアの解放は1870年代に持ち越されることになった。

当時のバルカン諸国では政府自身が民族の解放や統一の推進者であったことから、1860年代にブルガリア人移民たちが支援を求めて接触したのが、これら諸国の政府であったのは当然であったと考えられよう。しかしラコフスキは、1863年にアテネやツルナ・ゴラを回った時点で、これら諸国の領土拡大の野望を察知したのであった。バルカン諸国への疑念は、レフスキなど青年派の活動家に継承されていくことになる。また、1860年代にあつては移民社会のブルガリア人組織と、バルカン諸国内の組織やオスマン帝国の直接支配下にあつたボスニア、ヘルツェゴヴィナやイピロス、テッサリア、アルバニアなどの運動の指導者とのあいだに、具体的な連帯が存在していたかについては、明確ではない。

バルカン諸国政府のあいだで同盟が模索されていた1860年代には、セルビア人、ブルガリア人などの知識人の中からは東方問題を解決する鍵としてバルカン連邦案が考察されてきた。オスマン帝国に隣接するハプスブルク帝国では1848年革命時および革命後に、多民族国家である帝国の連邦的再編が被支配諸民族のあいだで繰り返し議論されてきたが、連邦構想はハプスブルク帝国内のセルビア人などを通して、バルカンの南スラヴ人にも紹介された。ハプスブルク帝国における連邦制は、帝国を解体せず諸民族の完全独立に代わるものとして考えられたが、オスマン支配に対する革命や反乱という形で解放運動が形成されてきたバルカンでは、連邦制は東方問題解決の方策であった。

初期にバルカン連邦を唱え、後の連邦構想に影響を与えたのは、ヴォイヴォディナのセルビア人政治家ポリト=デサンチッチ(M.Polit-Desančić)である。彼は早くも1862年の論文の中で、東方問題の問題点はバルカン諸民族の独立への要求と列強の利害関係の対立であると指摘し、バルカン連邦こそがバルカン半島において内的には独立を、対外的には中立を保証するとした。彼はスラヴ人、ルーマニア人、ギリシア人が国家連合を形成し、スラヴ人であるセルビア人とブルガリア人が連邦国家をつくることを主張した。さらにアルバニア人、トルコ人などムスリムに関しては、民族に沿って自治を与えるとした。セルビア公国の首相ガラシャニンも連邦制を主張していたが、

1860年代にはヴォイヴォディナ政治家のミレティチ (S.Miletic)、セルビアの活動家ヨヴァノヴィチ (V.Jovanovic)をはじめ複数の人々が同様な構想を打ち出した。

この時期、1867年にはジュネーヴに「ヨーロッパ連邦」の実現を謳った平和と自由連盟 (Ligue de la Paix et de la Liberté) が設立され、連邦制を唱える南スラヴ人たちも関わっていた。1869年に開かれた同連盟の会議では、東方問題を検討する特別委員会が、東方諸民族の自治と独立を前提にした民主主義と連邦主義を基礎にして東方問題は解決されるべきであるとの報告を行なった。

ブルガリア人の中で連邦制を主張したのは、1870年代にレフスキと共に青年派の運動を指導するリュベン・カラヴェロフ (Л.Каравелов) であった。彼は1866年にノヴィ・サドで結成されたセルビア人の政治組織オムラディナ (Омладина) の指導者であったヨヴァノヴィチと接触があり、オムラディナそして平和と自由連盟とも密接な関係を持っていた。カラヴェロフは1870年に発表した革命中央委員会の綱領の中で、スイスをモデルとしたブルガリア人、セルビア人、ルーマニア人によるドナウ連邦を打ち出したのであった¹⁶。しかしバルカン諸民族との連帯を強調するカラヴェロフは、ブルガリア内での蜂起を優先するグループとの意見の対立から、のちに革命中央委員会から離れていくのであった。

7. おわりに

バルカンでは1875年のボスニア＝ヘルツェゴヴィナの農民反乱を機に再び情勢が逼迫し、ブルガリアでの四月蜂起、セルビアとツルナ・ゴラのオスマン帝国に対する宣戦、露土戦争の勃発に至るのであった。本稿では、1860年代のブルガリア人の解放運動と他のバルカン諸国の動向との関係を概観しながら、現代につながるバルカンにおける空間認識に関する考察を試みた。中世にはビザンチン帝国の支配や影響を受けながら水準の高いキリスト教文化を保っていたバルカンの民族は、その後500年にわたるオスマン帝国の支配の中で農民に貶められるが、自らの言語とキリスト教信仰は維持してきた。イスラーム帝国の中でキリスト教徒という一体感を持ちながら、それぞれの民族は「民族」としての意識を自覚するとオスマン支配からの解放を模索していくことになった。19世紀の民族解放運動の中で育まれた共通の敵に対する共闘の意識、そ

¹⁶ “Програма на Българска революционен централен комитет”, *Христоматия*, с.360-361.

して共闘の歴史、さらにはバルカン連邦構想などがバルカンにおける今日の空間認識の土台にあるのが明らかであろう。

独立後のバルカン諸国は1912年からのバルカン戦争、そして第一次世界大戦で諸国間の対立をあらわにし、広大な領土を有していたオスマン帝国自体は、1922年に崩壊した。トルコ人は共和国を作り出し、西欧化、近代化をはかりながら国民国家を目指す過程で、それまで歴史を共有してきたバルカン諸国との関係を重要視せざるを得なかった。オスマン帝国解体に伴う領土や国境線の問題、住民交換や少数民族問題など、トルコを含めてバルカン諸国のあいだには課題が残され、対立要因となっていたのである。そうした状況の中で、地域内の対立を解消し、地域的な協力関係を強化する目的で誕生したのが、1930年に始まるバルカン会議であった。短期間であったがギリシア、ユーゴスラヴィア、ルーマニア、トルコ、ブルガリア、アルバニアの政治指導者の半公式的な会議として重要な役割を果たした。第二次世界大戦後の冷戦は、バルカン諸国間の地域に根ざした関係を押しさえ込んでしまったが、冷戦終結直前の1988年、6カ国は再び地域の平和と安定を目指して地域協力を構築し始めたのであった。